

広報ちゅうざん



1月号

2008年1月1日発行

1月号 目次

巻頭の挨拶

「人生を支える医療をめざして」(2頁)

リハビリ看護の魅力とは?(3頁)

訪問リハビリテーション(4頁)

グラウンドゴルフ交流会(5頁)

平成19年11月の入退院状況(6頁)

人生を支える医療をめざして

ちゅうざん病院 理事長 今村 義典

新年明けましておめでとう御座います。

今年も、診療報酬改定をはじめ、様々な医療の問題が山積しています。国の医療政策に在宅医療が重視されていますが、療養病床二十三万床の入院の削減や医療費抑制策の一環としての在宅医療の推進であるとか、いろいろ批判も聞かれます。

しかし **お家に帰れて嬉しい、有難う** という患者さんからの言葉は、医療者にとって一番の励みになります。当院のリハビリ医療は、治療が終われば、障害を抱えていても出来るだけ住み慣れた自宅で、家族や親しい多くの知人に囲まれて楽しく生活を送れる事を目標の一つに掲げて治療を行っています。

私共が、日常の診療で感じる事は、病気が治ったり、通院が可能な程度まで回復すれば、殆どの方が自宅に帰れることを楽しみに治療に励んでいくという事です。 **目標や希望を持って治療に励む事も治癒力を高める要因になります。**

いろいろな事情で自宅に戻れないと分かったときの患者さんの落ち込

みは、見えていて気の毒で一緒に気が滅入ってきます。

入院しリハビリ治療に励んでも、大半の方が脳卒中やケガなどの後遺症を残し、自分一人では日常生活に不便をきたし、周りの家族や知人の助けを受けなければ生活できない状態であることが分かったら、家族に迷惑をかけるれないと在宅生活を遠慮したり、気持ちはあっても職場復帰を諦め、社会生活に背を向けた人生を送るようになる方を沢山見かけます。

不便から立ち直る工夫をするのが、リハビリ医療＝障害医療であります。 障害の回復の治療、杖や車椅子など補装具による代償機能の活用、住宅や街の段差など環境の障害を解消し、出来るだけ自分の活動性を取り戻し、またヘルパーなどの在宅介護支援サービスを活かし、 **出来なくなったこと** を嘆くのではなく **残っている能力で何が出来るか** と可能性を見付け工夫しながら在宅・社会復帰を目指すのがリハビリの基本的姿勢であります。

国の在宅医療が推進される理由には、社会的・経済的な要因もあります。が、患者さんにとって在宅生活は本来あるべき状態であると考えられます。今後、在宅医療の推進は、これからの地域医療の核として医療・介護福祉の連携を進め地域医療のネットワークを作る良い機会だと捉えています。

病院から在宅療養支援診療所、訪問看護ステーション、通所介護・通所リハビリ施設等との連携強化により、障害者や高齢者が、安心して住みやすい安全な地域社会を目指して新たな年の医療を希望を持って支援したいものです。

リハビリ看護の魅力とは？



副看護部長 仲西壽美

リハビリ看護をセラピストのように一言で表現することは困難ですが、患者さまがスムーズにリハビリができるよう転倒予防などの環境整備や合併症・再発予防等の体調を管理する縁の下の力であると考えます。

そしてセラピストとの訓練で身につけた動作を在宅復帰後の生活をイメージして、病棟での日常生活に定着させることが私たち看護師の役割として捉えています。

患者・家族のニーズで多いのがトイレが出来れば…ということから私たちはトイレ動作に最も力を入れて取り組んでいます。

そのため、尿意獲得に向け時間毎のトイレ誘導は勿論の事、介助量軽減に向けて動作の訓練を日常生活の中で行っていきます。

また、入浴動作や更衣動作、更には患者さまが行きたいところに自分で行けるように、車椅子の駆動訓練にも取り組んでいます。

その結果、失禁がなくなりトイレへ自分で行き一人で排泄動作ができるようになった患者さまを見ると、手を貸す事をせず、根気強く患者さまのペースに合わせて援助してよかったと感じます。しかし急性期病院で治療を終えられてリハビリ病院へ入院された患者様及び家族の方の多くが

「じいでは何でも自分でやらないといけないんだね…」

「前の病院では車椅子を押してくれていたけど…じいではやってくれない」

「自分で出来ないからお願ひしてほしい…」

そのような患者様からの不満の声に私たち看護師は胸を痛める事が多々あります。

手伝う事は簡単です。私たち看護師も時には待つことをせず手伝ってしまうがちです。待っているより手伝ってしまった方がラクで効率がよいのですが、これでは患者様自身の能力を奪う結果になってしまいます。

出来る動作が増えると患者様の笑顔も多くなり、私たちの励みに

なり一段とモチベーションがあがります。

このように私たちの頑張り次第で患者さまが変わることによりが
いを感じています。

それこそがリハビリ看護の魅力であると考えています。

訪問リハビリテーション

理学療法士 立花修平

訪問リハビリテーションでは、病気やけがや老化などにより、
心身に何らかの障害を持った方が、在宅における日常生活にお
いて自立し、主体性あるその方らしい生活が送れるようにお手
伝いしています。

★訪問リハでは以下の方を対象としています

- ① 通院などの外出が困難な方、
- ② 在宅生活上何らかの問題がある方
が対象となります。

①の対象者に関しては、継続的に長期にわたってサービスを

提供することもあります。②の対象者には退院直後または
在宅生活をおくられていて状態が悪化した直後に、短期間で
集中的なサービスを提供しています。

★訪問リハでは以下のことを目的としてサービスを提供致し
ます ちゅうがきん病院

- ① 日常生活動作、日常生活関連動作（家事等）の改善
 - ② 生活不活発病の防止
 - ③ 家族に対する介助指導
 - ④ 自主トレーニングの指導
 - ⑤ 住宅の環境整備に対する助言
 - ⑥ 必要な福祉用具選定に対する助言
 - ⑦ 趣味活動、社会活動に対する援助
- 訪問リハでは利用者だけでなく、その家族に対しての支援、
また身体的な支援だけでなく心理面に対する支援も行ってい
けるように心がけています。

★訪問リハを利用するには

介護保険を利用されている方は、担当の介護支援専門員にご相談ください。医療保険利用の方は当院玄関入ってすぐの地域連携室職員もしくは、担当相談員にご相談ください。但し訪問リハでは担当医師より訪問リハの必要性が認められた方がご利用いただけます。御了承ください。

グラウンドゴルフ交流会



みなさん、日々のリハビリに励んでいらっしゃるでしょうか？

本日は『グラウンドゴルフ交流会』についてご案内させていただきます。

来る1月28日(月)、神奈川県横浜市にある障害者スポーツ施設「横浜ラポール」より脳卒中片麻痺の当事者・ご家族の方々が来沖され、当院入院中、外来・通所リハを利用している方々の『グラウンドゴルフ交流会』を企画しております。

「横浜ラポール」は、障害を持った方々がスポーツを通して機能・体力を維持さらには向上に向けリハビリを楽しみながら続けている方が利用している施設です。今回はその施設を利用している方々が「旅リハ」の企画で3泊4日の予定で来沖され、沖縄観光の他に、ちゅうざん病院ちゅうざん病院を利用している方々との『グラウンドゴルフ交流会』を楽しみにしているとのこと。

昨年の2月にも同様のスポーツ交流会が行われ、ちゅうざん病院入院中の方、外来・通所リハを利用している方々が参加され、横浜からの参加者と一緒(トナリ)にスポーツを楽しんでいる姿が見られていました。

会場は「宜野湾海浜公園 多目的広場」、時間は午後2:30開始を予定しています。

尚、現地でのサポートは当院のスタッフにて行いますが、参加希望される方はご家族での送迎が出来る方とさせていただきます。

**参加に際しましてのご質問・ご相談がありましたら、
階リハビリ室までお気軽にお問い合わせください。**

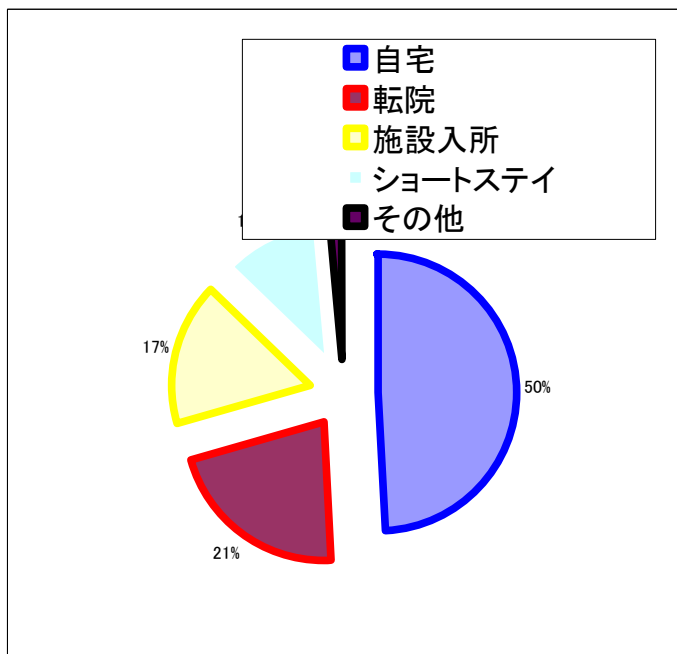
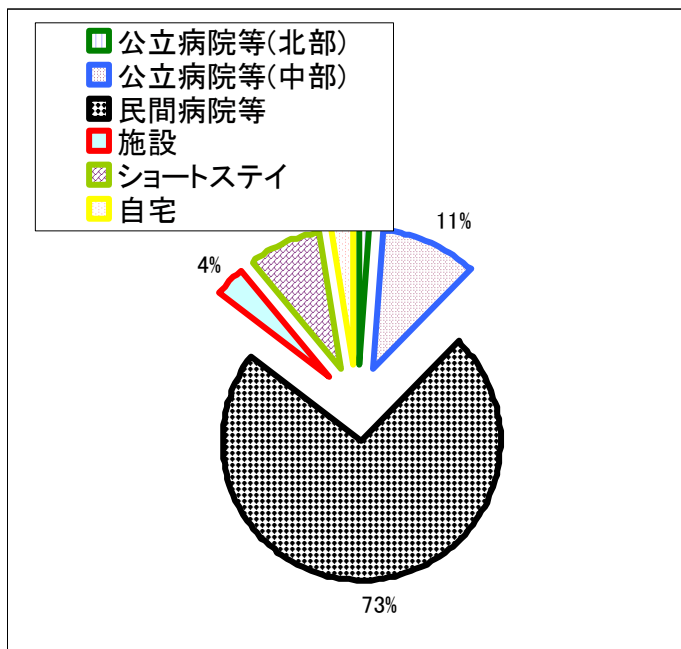
グラウンドゴルフ交流会運営委員

理学療法士 佐藤 麻美 中留 美沙

【平成19年11月入退院状況】

【入院患者数： 82 名】

【退院者数： 72 名】



ちゅうざん病院

〒904-2151 : 沖縄市松本6丁目2番地1号

電話 982-1346 FAX 982-1347

「広報ちゅうざん」編集：鈴木知詩